

# ⑪ 西区境之谷公園こどもログハウス 自分たちのものとして施設を運営

## 1 一参加の準備をする

●町内会を中心とした地域コミュニティが健在

この地域は、都心部に近い、下町の雰囲気を残した住宅地。古くからの人も多く、町内会を中心とした地域コミュニティが健在である。昔と較べ弱くなってきたとはいえ、地域が子供に目をかける余裕が、まだ残っており、子供たちは近所のおばさんを殆ど知っている。

## ●候補地の選定、委員会の立ち上げ

候補地選定の理由は、管理運営を担う地元組織がしっかりしている、子供の活動が盛ん、

様々な意見（関連局、区、市民のヒヤリングで出た意見）

### 1 参加の準備をする

急に住民参加といっても無理。日頃から地域をよく知り、スムーズな関係を作っておく必要を強く感じた。（区）

昔は学校が地域拠点だった。横の繋がりは学校を中心に形成される。もう一度、学校を地域の拠点にしていく必要がある。（建設委員）

今の地域の問題を担っているのは高齢者。若い人は地域のことに関心が薄い。（建設委員）

行政主導で住民参加を行っても限界がある。地元情報に流し、声が上がってくるのを待つ必要がある。（区）

現在区に期待するのは、施設運営の中で持ち上げることを局にフィードバックする仕組みを作ること。（局）

### 2 地域の人たちと一緒に施設を考える

素人に建築的な意見を聞かれても、あまり答えようがない。（建設委員）

ワークショップや建前等を地域と一緒にやることにより、コミュニケーションのパイプが太くなった。（区）

建設委員会の中身をもっと自由闊達にしていく必要があるが、行政の対応を少し変えればそれは可能だ。（区）

現在の体制ではワークショップに積極的に関るのは無理。そのための時間と人を配置しないとできない。（局）

建築的な事柄について住民の意見を聞くと言っても限界がある。専門家に任せるところは任せてしまったほうがいいのか。（局）

### 4 自分たちで施設を運営する

運営はもっと地元任せにしまったほうがいいのか。任せられれば、やらざるを得ないし、又、やっていくこともできる。（建設委員）

区内で建設段階と運営段階が分かれているが、継続してやっていけるような仕組みにする必要がある。（区）

施設内で食事をしたという要望が多いが、1館認めると全館に波及してしまうので、対応が難しい。（局）

ログスタッフの任期が規約上2年だが、スタッフは経験を要するので、期間を延ばしてほしい。（建設委員）

建設当時小3、現在中2の子供たちの意見（男女各2人）

何ができるかあまり期待していなかった  
おっ駆けっこや隠れんぼをして遊んだ  
食事禁止だったけれど、隠れて食べていた  
他の学校の生徒となんとかけんかをした  
ログで友達になったやつもいる。おもしろいやつだった  
落書きが楽しかった。特に、人を見るのが楽しかった  
ログへは一人では来ない。必ず友達と連れ立って来た

### 設計者の感想

子供にとって、地域施設は大人が想像するほど意識されていないようだ。近くであればそこで遊ぶし、なければないで、他の場所を探す。今何がなかでなく、今何があるか、何が利用できるかが最大の関心事であるようだ。利用できるものであれば、最大限活用する。

だからといって、子供にとって地域施設はどうでもいいということではない。むしろ、意識されないだけその重要性は大きいように思える。

区民利用施設が不足している等であった。

候補地が決まると、連合町内会長に区が委員メンバー選定の相談をすることとなった。

## 2 一地域のひとと一緒に施設を考える

### ●建設委員会の開催

建設委員会は都合四回持つこととし、一回目は委員及び子供たちと類似施設見学後、開催。事業・施設概要および建設予定場所の説明を行う。建設場所は他に可能性がなく、提案場所に決定。二回目は建設場所を現地で確認後、基本プラン案を検討し、課題を抽出。

### ●ワークショップの実施

建設委員会主催で子供対象のワークショップを開催し、設置する遊具の提案をしてもらう。施設概要説明後、四、五人のグループで、どんな遊具が欲しいかを絵に描きグループ別に発表、意見交換を行う。非常に現実的なものから、夢のような提案まで様々。建設委員のメンバーもワークショップに参加し、子供

管理が大変なことから地下迷路は設けないことに。三回目は、ワークショップの結果の報告後、前回提出された課題及びワークショップから抽出された遊具を落とし込んだプランの検討、承認。ここから実施設計に移行する。

### データ

事業主体	緑政局管理課
関係部局	市民局地域施設課、西区区政推進課、西区地域振興課、建築局庁舎施設課
事業概要	こどもログハウス建設事業
施設概要	所在地/西区境の谷105-1 敷地面積/9,354㎡、延べ床面積/223㎡、2階
事業期間	基本設計/平成2年6月～平成2年8月 実施設計/平成2年8月～9月 平成3年4月オープン
参加形態	建設委員会、運営委員会、ワークショップ、建設参加

たちの視点で施設を考える機会ともなる。  
提案は事務局で検討、取り入れ可否を評価し、建設委員会に報告。子供たちも、施設づくりに意見を出せる場は楽しかったようだ。

### 3 施設を建設する

#### ●地域ぐるみで施設の建設に参加

建設委員会主催の上棟式では、子供たちが丸太を切り、絵を描き、ベンチや跳び丸太を造る。地域で出した屋台のものを食べ、廃材で造った遊具で遊び、楽しい一日を過ごす。施設の装飾の一部を、小学校の図工の時間に子供たちが木で造る。

そのように、施設建設に地域ぐるみで参加したことにより、地域にとっても施設が身近かに感じられるものとなっている。

### 4 自分たちで施設を運営する

#### ●利用率の高い施設

施設は開設後五年が経過、顔なじみの子供や遠くからくる子供も多く、利用率は高い。  
・午前は保育園・幼稚園、小学校の団体利用が多い。母親の懇談の場ともなっている。  
・夏休みに子供会が主催する公園でのキャンプでログを開放。子供に人気がある。  
・ログと公園の一体的な遊びが展開している。  
●ログスタッフの緩やかな運営参加  
・月に一回、運営委員会会長とログスタッフが定期的な意見交換の場を持ち、意志疎通を図りながら運営を行っている。

・運営委員会会長を含んだログスタッフ会議が積極的に運営を担っている。

#### ●継続性のある運営

スタッフが来館する子供たちの顔なじみになつていくとともに、ある程度の専門性を持つて、館運営を日常的に担っている。子供たちに厳しい意見もどんどん言うし、また子供たちも言い返すような気安い雰囲気をつくっている。

#### ●専門性を持った運営委員会会長

連合町内会長が運営委員会会長となつていくが、施設が地域の子供たちのために活用されるよう、スタッフ間や行政との調整役も含め、積極的に館の運営を行っている。

### 5 地域に根づいた施設にするための課題

#### ●情報を早めに地域に示せないか

情報を早めに地域に示し、やり方を工夫すれば、当地のように地元組織が地域の情報を持つていくところであれば、例えば、地域の専門家を建設委員会メンバーとして参加させることも可能であったかもしれない。

#### ●意見の出しやすい建設委員会の雰囲気！

行政の人数が委員会メンバーより多く、大きなテーブルを囲んでの会議の場は、経験の少ない地元の人が自由に意見を言える雰囲気ではない。もっと気軽に意見を出せるような場づくりの工夫が必要ではないか？

●施設運営をもっと地元にかかせることではないか

当地のように地元組織がしっかりしているところでは、施設の運営をもっと地元にかかせることはできないか。それが、継続性や専門性を持ち、地域に密着した施設運営力、更には、そこでの活動を軸に、地域に関する人材の発掘・育成等地域の力を培うことにつながるのではないか。

●設計のもっと早い段階で意見を聞いて、利用の仕方などを議論できるといい

委員に施設プランに対する意見を聞いても、建設的な意見はあまり出てこない。委員は、建築がどのようなプロセスでまとめられるのかも知らない中で、それに対する意見を求められることに戸惑いと遠慮がある。「建築」として形にまとまる前の段階で意見を聴いた方が有効ではないのか？

●アイデア抽出のためのワークショップをもう一歩進めて

ここでのワークショップはアイデア抽出のみに終わってしまった。子供が意見を発表できる場が設けられた意味は非常に大きいですが、一方でいくつかの限界も感じられた。

①出された様々な意見を具体化へ向けて絞り込んでいくための過程（皆で決断していく過程）がなかったため、子供たちにとっては、意見の言いっぱなしになってしまった。②ここでのワークショップは対象が遊具のみであったが、例えば、子供がログでやりたい活動を引きだし、更に、それを運営に結び付けていくような仕組みがあるとよかった。

竣工祝い  
大勢の子供たちが集まった



建前  
丸太を削り、ベンチや跳び丸太に



ワークショップ  
建設委員長が子供たちに説明を

